

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21720184

研究課題名（和文）日本語学習者の終助詞の使用に関する総合研究-「よ」「ね」「よね」の使用を中心の一

研究課題名（英文）A Study on use of Japanese non-native speakers sentence-final particle: Focusing on *yo*, *ne*, and *yone*

研究代表者

高 民定 (KO MINJEONG)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号：30400807

研究成果の概要（和文）：

日本語の終助詞は日常会話において頻繁に使われている。本研究では接触場面における終助詞による言語問題について言語管理理論に基づき、分析・考察を行った。中でも非母語話者（日本語学習者）の終助詞の「よ」、「ね」、「よね」の使用に注目し、非母語話者がどのように終助詞の機能を選択し、言語問題を調整しているかを言語表現の生成と管理の側面から分析・考察した。その結果、日本語非母語話者の場合、終助詞の機能選択において偏りが見られるだけではなく、過剰一般化や過小使用が頻繁に見られていることが明らかになった。また、それに対する非母語話者による終助詞の管理はほとんど行われていないことが分かった。

研究成果の概要（英文）：

Japanese sentence-final particles are used extremely frequently in utterance. This study addresses the usage problem of Japanese sentence-final particles in contact situation from a language management point of view. With a focus on the final particles *yo*, *ne*, and *yone* used by non-native speakers select the function of the sentence-final particles and how they adjust the language problem caused by their use from the viewpoint of generation and management process. The result of the research shows that non-native speakers mainly generate and manage the function, in part, of *yo*, *ne* and *yone*. In addition, the result also non-native speakers are occurring at high frequency. It has been found that in most cases, native speakers note over-and-under generalization while non-native speakers use those final particles without management, being unaware of the deviation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語学 終助詞、第二言語習得、接触場面

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語の日常会話において終助詞は頻繁に使用されており、中でも「よ」「ね」「よね」の使用は、話し手の情報の伝え方や聞き手への態度(配慮)とも関係していることから、コミュニケーションへの影響も大きいと言われている。日本語の学習者にとっても適切な終助詞の使用は、円滑なコミュニケーションのために不可欠である。

(2) 一方、日本語教育においては、終助詞は初級レベルの比較的速い段階で、教科書の会話のモデル文を中心に導入されることが多い。しかし、その習得に関しては、上級レベルになっても使いこなすことは難しいと言われている(ナズキアン富美子(2003)、張(2005))。終助詞の習得については、①早い時期に習うにも関わらず、なぜ上級レベルになって誤用が現れるのか、②日本語教科書において終助詞の扱われ方はどのようになっているか、③学習者は終助詞の使用をどのように理解・認識しているのか、④学習者にとって難しいのは「よ」「ね」「よね」のどの終助詞で、どのような機能なのか、⑤学習者の終助詞の不適切な使用はその場のコミュニケーションにどのような影響を与えているのか、などの疑問があるが、これらについて従来の研究ではまだ十分な調査と考察がなされていない。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は、これらの疑問点を明らかにすることにより日本語の学習者に対する効果的な終助詞の指導法を提示することを研究目的とした。

(2) そのための第1段階として、本研究の

3年間では、基礎研究として、初級、中級、上級学習者の接触場面における終助詞の使用とその言語問題を調査し、横断的な分析を行うことにより、日本語の学習者の終助詞使用の実態を明らかにすることを研究目的とした。具体的には以下の3点を研究課題とした。

①学習者の終助詞「よ」「ね」「よね」の使用に関する理論的・方法論的枠組みを得るために、終助詞およびその使用に関する文献を収集する。

②初級、中級、上級の日本語教科書における終助詞の扱われ方の現状を調べるとともに、本研究に有効な調査協力者を選定するための学習者の終助詞の学習状況を把握する。

③日本語の学習者の接触場面における終助詞使用のデータを収集し、それを基に、学習者の終助詞の使用や言語問題について分析する。また、母語話者との比較のために、母語話者同士の会話(母語場面)における終助詞の使用についても調査、分析を行う。

特に、接触場面の終助詞の分析においては、日本語学習者がどのように終助詞の機能を選択し、終助詞の使用上の問題を調整しているかを、言語表現の生成と管理の側面から分析・考察した。

### 3. 研究の方法

(1) 初級、中級、上級の日本語教科書における終助詞の扱われ方の現状を調べるとともに、本研究に有効な調査協力者を選定するための学習者の終助詞の学習状況を把握した。

(2) 1年目と2年目の研究においては、日本語の学習者の接触場面における終助詞使用

のデータを収集し、それを基に、学習者の終助詞の使用や言語問題について分析した。また、母語話者との比較のために、母語話者同士の会話(母語場面)における終助詞の使用についても調査を行い、それを基に終助詞の機能リストをまとめた。調査協力者や調査場面については以下のとおりである。

#### ①調査協力者

本研究では、初級、中級、上級、それぞれ10組の接触場面と、5組の母語場面の終助詞の使用を調査した。

#### ②調査場面

調査場面の選定については、終助詞の使用と、会話スタイル、相手との関係などを考慮し、初対面による接触場面を調査対象とした。これまでの終助詞の調査は、主に友人関係を対象にしたものが多いが、それでは終助詞の使用に偏りが見られ、多様な終助詞の使用を考察することが難しい。初対面では、初めて接する相手との関係作りのために、場面や状況、相手との関係を考慮した発話が見られると予想されるため、本調査では初対面を調査場面とした。

#### ③調査の手順

会話はそれぞれ20分程度収録し、その後、文字化を行い、数日後にそれぞれの調査協力者にフォローアップ・インタビュー(ファン2002)を行い、会話時の意識や普段の終助詞の使用や習得に関する意識を調査した。

### 4. 研究成果

本研究の成果としては、大きく二つの方向からとりあげることができる。一つは日本語学習者の終助詞の学習状況を把握するために行った教科書分析(7冊)による結果である。教科書の機能分析からは以下のことを指摘することができた。

#### (1) 初級・中級教科書において終助詞の

機能には偏った使用(提示)が見られていることから、学習者が終助詞のある機能だけが過剰使用となったり、または過小使用となったりするという問題が予想されることを指摘した。

(2) 上記の結果を踏まえ、効果的な終助詞の指導のためには、教科書の会話文などを通じて、終助詞の機能がどのような状況で使用され、どのような機能を持っているかを普段から学習者に意識させることや、終助詞の必須性と運用面の注意を社会言語能力の視点から見直し、学習レベルに合わせて指導していくことが重要であると言える。

もう一つは接触場面における終助詞の使用分析からの成果であるが、これについては主に以下の3点について知見を加えることができた。

(1) 初・中級日本語学習者に関しては、接触場面において、終助詞の不使用による問題が終助詞の使用による問題よりコミュニケーション上の問題になっていることが明らかになった。

(2) 中でも初級日本語学習者の場合、「同意・共感表明」という日本語の会話の促進に関係する機能の使用が、母語話者や上級日本語学習者に比べ極端に少ないことが明らかになり、それに関する初級日本語学習者への指導が至急に求められる。

(3) 一方、上級日本語話者に関しては、初・中級日本語学習者に比べると、終助詞の使用頻度は全体的に増えているものの、聞き手領域の事柄に対し自分の意見や意思を伝えるときに必要な終助詞の使用が母語話者に比べ少なく、上級日本語学習者の場合も終助詞の使用と習得は一部の種類や内容に偏っていることが分かった。これについては、会話データの量的な分析結果だけでは

なく、学習者の終助詞の使用に対する意識を調べたフォローアップ・インタビューの調査からも裏付けることができた。

(3) 海外の日本語学習者の終助詞の使用についても国内のものと比較・分析し、その特徴を明らかにすることができた。学習者の終助詞の使用は、学習歴、滞在歴に加え、国内外という日本語の学習や使用環境が影響すると考えられたが、それよりは個人の学習環境がより大きく影響していることが分かった。同じ教育環境と指導で日本語を学習しているにも関わらず、終助詞の使用において顕著な差が見られていることに対し、学習者へのフォローアップ・インタビューの調査からも日本語の会話の直接間接的な経験や、終助詞の含む日本語の会話のインプットが終助詞の習得に重要なカギになっていることが明らかになった。

なお、本研究では学習者の終助詞の使用の問題を「プロタクト」研究としてだけではなく、「プロセス」研究として、接触場面での学習者の実際の終助詞の使用と、そこでの言語問題を「言語管理」の視点から分析することも試みた。「プロセス」の分析において学習者の終助詞の使用上の問題が明らかになったものの管理プロセスとしての分析はまだ十分であると言えない。今後においては「プロセス」分析をより丁寧に行うことにより、学習者の終助詞の管理のあり方についてより明らかにしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

①高民定 日本語学習者の「よ」「ね」「よね」について-日本語初級・中級教科書の機能分析を中心に- 国際教育、4号、2011年、pp.11-23、査読無

〔学会発表〕(計2件)

①高民定、日本語学習者の「よ」「ね」「よね」の習得について-日本語初級・中級教科書分析を中心に-、韓国日本文学学科冬季研究大会、2010年12月18日、建国大学(ソウル市)、査読有

②高民定、日本語学習者の終助詞の「よ」「ね」「よね」の使用問題-国内外の接触場面データの分析から-、2011年世界日本語教育大会、2011年8月21日、天津外国語大学(中国天津)、査読有

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高民定 (KO MINJEONG)  
千葉大学・文学部・准教授  
研究者番号：30400807

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし